

4 20年目からの挑戦

1. 科学コミュニケーション推進室(1)誕生まで

代表取締役 吉田 隆

平成17年1月31日(月)、私は市川AIセンター長〇〇〇〇〇〇、科学コミュニケーション推進室長〇〇〇〇〇〇共々、武蔵野美術大学で開催中の卒業制作展に足を運んだ。昨年4月から5人の学生が取り組んだ武蔵野美術大学と山形大学の共同プロジェクト「未来材料のデザイン表現研究」の成果に向き合うためだった。今回は昨年7月に発足した「科学コミュニケーション推進室」が誕生するまでの物語である。

●リアルな発想:マテリアルコネクション

平成13年1月、「月刊未来材料」を創刊した。同年5月、大阪で開催された(社)高分子学会の総会会場となるリーガロイヤルホテルで二十余名の編集協力委員が一同に会す機会を持った。打上げの折、遠藤剛編集長(山形大学教授、東京工業大学名誉教授)より、「山形大学工学部敷地内の明治建築の重要文化財、米沢高等工業学校旧校舎の利活用を検討しているがいい案はないか?」と相談を受けた。遠藤教授は大学内外の人々が科学をテーマに交流する場としてのブック&カフェタイプの空間を思い描いておられた。大学と市民、観光客などとの「やすらぎの空間」作りを模索し、更にNTSの拠点作りも視野に入れつつ様々なアイデアを出したが、いずれも決め手に欠いた。平成15年5月、知人から膨大な新素材の実物DB(リアル・データベース)や応用製品、科学の知見等を常設展示し、素材のスペシャリストとユーザー市民の交流の場として注目されるマテリアルコネクション(米国NY)の紹介を受けた。「リアル」の発想で日本の商空間とは異なる、ダイナミックかつサイエンティフィックな空

間をユーザーと共有しようとする米国流の表現手法に刺激を受けたものの、それは物理的にも経済的にも容易に模倣を許さないアイデアだった。

●科学と芸術の出会い

平成15年7月、(社)産業デザイン振興会の会合の折、武蔵野美術大学の関係者から「最近、学生がカーボンナノチューブなどの先端素材に造形的な関心を持っている。美術大学も科学を学ぶ必要を感じる。」と伺ったことが、米国流の商空間から日本流の科学空間に発想を転じるきっかけとなった。つまり、「未来材料を造形表現(オブジェ化)する」さらに「アート力を借りて科学を一般に向け分かりやすく翻訳する」ニーズがあると考えた。同年9月半ば、旧知の武蔵野美術大学基礎デザイン学科の宮島慎吾教授に、文系と理系の学生による「未来材料」のオブジェ化を核とするサイエンスの翻訳表現構想を提案したところ、宮島教授は「芸術やデザイン教育は現実から遊離した部分がある。科学は芸術を現実に戻す力となる。」とその場で快諾された。更に、山形大学とのワークショップを武蔵美の事業として行いたいと積極的な提案をいただいた。同年10月、遠藤教授にワークショップ案を説明して同意を得た。宮島教授はワークショップの事業(予算)申請を大学当局に行い、平成16年1月、申請が認可された。2月には、宮島教授ととも山形大学を訪問し遠藤教授との対面が実現した。それは、科学とその「翻訳メディア」としての芸術との出会いの時でもあった。

●科学コミュニケーション推進室誕生

平成16年4月、武蔵野美術大学と山

形大学による「未来材料のデザイン表現研究」共同プロジェクトがスタートした。

①先端科学の研究について分かりやすい表現を研究し、コミュニケーターとしての役割を意識する、②その研究によって得られる材料により未来生活のイメージ表現を行なう、③山形大学・武蔵野美術大学・NTSの教員・学生・社員等のコラボレーション事業での交流成果を獲得することを目的とした。成果物としては、①未来材料のイラストレイテッドの制作、②未来材料マップとのデータベース作成、③分子構造等の立体モデル制作等を予定した。メンバーは、武蔵野美術大学は宮島慎吾教授、板東孝明教授、学生5名、山形大学は遠藤剛教授、森秀晴助教授、博士・修士課程を中心とする学生5名、その他宮城工業高等専門学校の永山広樹講師、NTS(吉田、岡田)による編成だった。

平成16年7月1日、科学技術情報部に専門家による専門家のための科学情報事業に加え、一般向けの科学情報事業を推進するため科学コミュニケーション推進室を設立した。



山形大学工学部内 米沢高等工業学校旧校舎(重要文化財)

●編集後記

花粉症大流行の兆しである。2,800億円産業ともいわれ、マスクをしている人が、多々目に付く季節である。あっちでクシオン、こっちでクシオン電車内がくしゃみで賑やか、千万。アレルギーというのは体質が遺伝するというのを耳にしたことがある。様々な医療、検査技術が日進月歩発達しているが、こと花粉症に関しては、この先進国日本においてもまだまだ決定打がでていない。なら後進、中進国と言われている国々の医療の実態はどんなものであろうか、平和ボケしている私には、把握しきれないものがある。でも前田先生のお話を伺いして、世界を駆け巡る検査装置の必要性は、実感することが出来る。その日が一日も早く来ることを、心よりお待ちしております。(あしだ)

●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係

FAX: 03-3814-9152 E-mail: k-kunimoto@nts-book.co.jp

NTSニュース

2005年3月号(通巻73号)
2005年3月4日発行